



岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111
振替名古屋637909

マイミュージアムの推進

財団法人 岐阜県陶磁資料館館長 今瀬量義



美濃焼は現在の多治見市・土岐市・瑞浪市・笠原町を中心に、7世紀頃より始まったと云われています。この地域は良質の陶土と豊富な燃料と水に恵まれ、古くから窯業地として

発展を遂げてきましたが、本格的な窯業地となったのは10世紀からの白瓷生産からと云われています。以来美濃焼は千有余年に至り、日本の陶磁史上極めて重要な地位を占めています。ことに安土桃山時代(16世紀~17世紀)には、古田織部らの指導による黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部等々、いわゆる桃山陶を創出した最も華やかな展開を見、これら『ものづくり』における技法と感覚は東洋のルネッサンスと高く評価され、美濃焼の伝統として今日の美濃焼に受け継がれています。これら長い美濃焼の歴史と貴重な資料を収集・保存・展示し、美濃焼業界の研鑽の場として、来館者の文化・教養を高めるという大きな役割と目的が資料館の使命であると考えます。

然しながら現状では資料(収藏品)も豊富でなく、資料収集に関しましても、予算的にも非常に厳しい状況の中にあるのが地方の資料館・美術館共通の悩みでもあります。館所蔵品で常設・企画展が開催でき、来館者に期待される内容で実施できる資料館・美術館は全国的に稀ではないのでしょうか。近年では館と館との相互協力で、展示内容の充実に務めているのが現状であります。

このような状況下で、果たして期待される資料館づくりが出来るのか、甚だ疑問であり

ます。内容のある企画展、特別展の開催こそが来館者に応えるためにも重要な課題であると考えますが、来館者数も他の多くの館と同様に現状維持の状況の中、リピーターの獲得のためにも、年5~6回の企画展、特別展を企画開催せざるを得ない現状にあります。

当館では、5~6年前より、マイミュージアム構想を掲げ、推進してまいりましたが、これらを推進するためには、コレクター(収集家)の皆様のご理解、ご協力が不可欠であります。それぞれの分野で長年にわたり収集されたコレクションには貴重な資料が多く、それを公開していただくことにより、より多くの愛好者・学識者に観賞・研究の機会を与えていただけることは、双方にとりましても大変意義あるものと考えます。

マイミュージアム構想では、「個人所蔵のコレクションをぜひ当館にて展示を」とPRに務めてまいりまして、コレクター諸氏のご賛同を得、多くのコレクション展として開催でき、時にはお教を乞うことも度々で、一石二鳥の成果を挙げてまいりましたが、これらはコレクター諸氏のご理解、ご協力の賜物であり、感謝、感謝の毎日でございます。

田舎の小さな資料館ではございますが、今後とも地場産業の皆さんの自己研鑽の場として美濃焼産業の振興と発展を願うとともに、来館者の文化教養を高める場として内容の充実に努めたいと思います。また、マイミュージアム構想の拡大をはかりながら、文化・産業の中核として期待され愛される資料館づくりをめざし邁進してまいりたいと考えています。

今後共ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

「装飾美術について」

期日：平成10年6月2日（火）13:30～15:30

場所：飛騨高山美術館ハイビジョンシアター

講師：長谷川賀子氏（飛騨高山美術館学芸員）

第76回公開講座が飛騨高山美術館において行われました。当日はガラス美術に興味のある方や県内各地の博物館関係者、地元の高校の美術担当教師等50名を越す参加者で会場はほぼ満席でした。美術館に設立の段階から関わってこられた長谷川賀子^{のりこ}さんによる講演の要旨を記載します。

<講演要旨>

1) 装飾美術とは

古くから人間は自らの周りを取り巻くものにさまざまな美を与え、モノの価値や存在意義を高めてきました。古代、原始の世界では装飾的な図像は呪術としての意味を持っていました。長い歴史の中でそういった模様象徴性、物語性が非常に大切にされてきましたが、産業革命を背景とした19世紀からの社会の変容はそれらの存在意義を変化させました。富レベルの上昇がもたらした住居など私的な領域へのこだわりが芸術家たちの装飾への取り組みを促し、絵画や彫刻・建築などの純粋美術に対峙する、いわゆる装飾美術となっていたのです。

2) 世紀末様式について

19世紀のヨーロッパにおいて、様々な装飾リバイバルと折衷を繰り返す中で登場したのがアーツ・アンド・クラフツ運動のウィリアム・モリスやアール・ヌーヴォーを代表とするエ

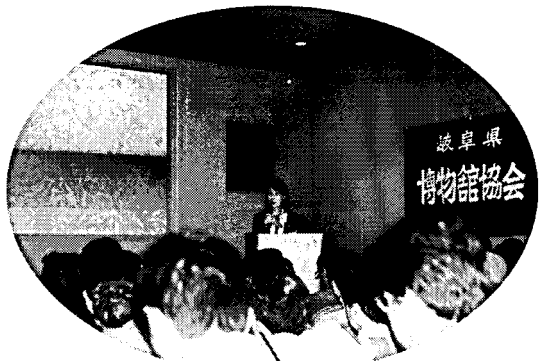
ミール・ガレです。彼らは絵画や彫刻を崇高なものとする概念を打ち崩し、よい装飾や身の回りの小芸術に創造の拠点をとろうとしました。かつては職人の領域であった装飾が芸術となったのです。

3) アール・ヌーヴォー

アール・ヌーヴォーはアール・デコと並んでよく耳にする世界的装飾様式の一つです。パリのオルセー美術館の装飾美術部門では、多くのスペースをこれに割いていますし、当館も重要なテーマの一つとして捉えています。

4) 産業と芸術

20世紀に入り、インダストリアル・デザインを始めとする新しい領域が確立され、装飾美術は少し古い概念となっていますが、次の時代にまで残る芸術として、私達の心を捉えています。装飾美術は19世紀における芸術が装飾をもってした産業社会への歩み寄りの成果であり、新たな精神を反映した近代化への動きであったと言えます。



講演の後、館内を見学させて戴きました。丁寧な解説を伺いながら鑑賞すると、それぞれのガラスが歴史を語りかけ、また、その存在を精一杯主張しているように感じました。

(記事：高山屋台会館 瀬木登美子 写真：日下邸芸館 寺地勇雄)

「新しい展示を求めて」

期日：平成10年6月18日（木）13:30～16:05

場所：岐阜市科学館

講師：荻野義雄氏・羽賀幸治氏

第40回を迎えた会員研修会は、「新しい展示を求めて」をテーマに、岐阜市科学館で開催されました。まず、「鉱物博物館建設に携わって」の演題で、本年5月に開館した中津川市鉱物博物館の学芸員、荻野義雄氏より博物館建設にかかる経緯等について、詳細な報告がありました。最初に館の目的として、以前より地元で寄贈され展示していた長島鉱物コレクションを核とし、日本三大ペグマタイトの産地であった苗木地方を中心とした地学資料の収集・保存・展示・研究をおこなうこと、「きらら広場」や「夜明けの森きらめきパーク」の各施設を含め、自然科学の学習・教養に資することについて説明されました。また、長島鉱物コレクションが希元素鉱物を主体としたもので、馴染みの薄いこれらの鉱物をいかに一般来館者にアピールするかについて検討が重ねられたこと、設計から施行に至る間の問題点などについて、実際の展示や事例をもとに紹介されました。さらに、「人と物との交流を図る」という施設運営の視点、「わかりやすい」「楽しく参加できる」という博物館展示の基本方針が、実際どのように反映されているかについても触れられるなど、鉱物を核とした新しい参加体験型複合施設への意欲的取り組みが明らかにされました。

続いて「ギフチョウランドのできるまで」の演題で、本年3月に開場した岐阜市科学館内のギフチョウをテーマとした常設展示につ

いて、同館副主査羽賀幸治氏より、ハイビジョンを使用しながら報告がおこなわれました。ここではいつきても楽しみながらギフチョウのことがわかり、自然環境への強い興味と関心を持たせることを目的とし、子供中心の参加体験型展示を基本としたことが説明され、それに基づく展示構成や展示品選定の経緯が紹介されました。

また、ギフチョウの飼育を通じ、それがいかに展示に活かされたかについても取り上げられました。その後、同氏の解説で実際の展示を一同で見学し、各展示品の詳細について理解を深め、さらに同館のご厚意で希望者はプラネタリウムを観覧して、研修会を終わりました。

今回発表のあった2館はほぼ同時期に完成し、共に特色あるテーマを設定した自然史系の展示となっています。また、どちらも参加体験型展示の積極的な導入をすすめ、「わかりやすい」「楽しく」などの共通したキーワードをもつものでした。その具体的な展示の手法は様々ですが、21世紀を見据え、新しい展示の一つの方向性を考える上で、大変有意義な研修会であったようです。

（機関紙委員 岐阜市歴史博物館 大塚清史）

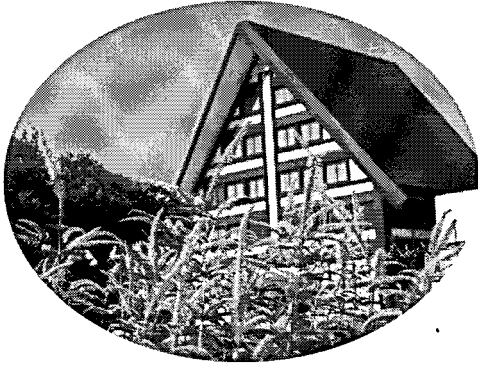


内藤記念くすり博物館

〒501-6195

羽島郡川島町エーザイ(株)川島工園内

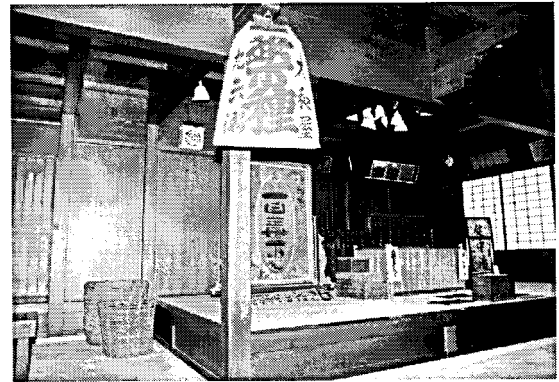
TEL 058689-2101



昭和46年に開館して以来、薬学薬業専門の産業史博物館として全国にその名を知られるくすり博物館。展示館には薬の原材料から製造・販売にかかわる様々な歴史的資料が陳列されている。一見、難しそうなテーマであるが、実際の展示はそうでない。「祈り」のコーナーに全国各地の病気平癒に関する絵馬や護符、玩具などが並び、「中国医学の伝来」では良く知られた葛根湯などの漢方薬やその道具、「蘭方医学の伝来」では教科書でお馴染みの『解体新書』や薬箱・手術用具などが展示されている。さらに「薬をつくる」「薬を商う」など、いずれも人々の生活と深く関わるものが多い。いずれのコーナーも病を克服するために薬をつかった庶民の視点が活かされており、それが私達に深い共感を与えているようである。さらに、薬商の看板・印籠・薬箱・広告・秤・乳鉢など、コレクションとしてまとまっているものも多い。これらは単に薬というテーマを越え、広く日本と世界の文化を知る上での、貴重かつ特色ある資料群となっている。

さて、館外に足を運ぶと、そこは工場的一角とは思えない広大な自然が広がっている。「川島工園」と名付けられたこの工場や博物館の敷地は、「公園のような工場」に由来するものである。博物館前にはその自然林に抱かれて、600種以上の植物を栽培する薬草園・温室・薬木園が配置されている。原産・効能等が簡

潔に記された解説板をたよりに園内をめぐれば、四季折々の花に出会うこともできるであろう。ここでは、冬季を除く毎月第一日曜日に開花している薬草を取り上げて薬草説明会が開かれる。また、薬草の植物画を描く植物画教室が毎月最終土曜日に行われ、その作品は薬草園等の観覧に便利な『薬用植物に親しむためのハンドブック』に生かされている。その他、夏休みには体験メニューを揃えた子供教室も開催されるなど、博物館の特色を生かした多彩な行事には興味を引かれるものが多い。さらに、館内には約3万点の薬学関係の蔵書をもつ図書室が公開されているほか、エーザイの社史コーナーが設けられ、最新を誇る工場の見学も平日2回実施されるなど、展示を中心とし



た各施設との連携もすばらしく、来館者の多様なニーズを満たすものとなっている。

日々、多くの人々を迎えるくすり博物館。その魅力は薬という独特のテーマのほか、一般来館者の視点を重視するコンセプトが、展示・行事・施設そして職員の方々にまで徹底されていることも大きいようだ。

【写真】左：関節炎などに効くクマガイソウと博物館

右：展示室内の薬屋復元

【交通】岐阜駅からバス約35分「川島学校前」下車1.5km

【開館時間】9時～16時

【休館日】月曜・年末年始 【観覧料】無料

(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 大塚清史)

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。